

THE collected works of LYDIA SICHER  
17 Family Constellation

P.170～ 【資料】 **Characteristics of the Oldest** 長子の性格特徴

1) 「子どもの教育」(A.アドラー) P.122

子どもたちが家族布置の中での自分たちの位置に応じて発達させる特徴について、もっと多くのことを書くことができます。第一子もまた共通した多くの特徴を持っています。第一子は、二つか三つのタイプに分類することができます。

私は、長い間この問題を研究してきましたが、たまたまフォンターネ(\*)の自伝中の次のような一節にぶつかるまでは、この問題ははっきりとした形をとってはいなかったのです。フォンターネはそこで、フランスからの移民である父親が、ロシアに対するポーランドの戦争に参加した様子を述べています。父親は、例えば、一万のポーランド人が五万のロシア人を倒し敗走させた、ということを読むといつも非常に上機嫌でした。フォンターネには父の喜ぶわけがわかりませんでした。それどころか、五万人のロシア人は一人のポーランド人よりも強いのは当然だ、と大いに異議を唱え、「もしもそうでなければ気に入らない。強者はいつも強者であるべきだから」といいました。このパラグラフを読んで直ちに「フォンターネは第一子だ」という結論に達しました。このようなことをいうのは第一子だけです。フォンターネは、一人っ子であった時に、家族の中で力があつたことを覚えています。そして、弱者によって、その王座から転落したことを不正である、と感じているのです。実際、第一子は常に保守的な傾向を持っていることが明らかにされました。第一子は力、規則、破ることのできない法律を信じています。専制政治を非常に率直に弁解することなく受け入れる傾向があります。力のある地位に対して正しい態度を持っています。一度は自分でもこのような地位についていたからです。

(\*：ドイツの作家)

2) 「勇気づけて躰ける」(R.ドライカース) P.35～P.38

外的環境を形成する二番目の要素は、家族布置です。この言葉は家族ひとりひとりがお互いにどのような関係を保っているか、その特徴を表しています。それはちょうど、ひとつの星が他の星と関わることによって北斗七星を形成しているのと同じことです。家族には、みなそれぞれ独自の形があります。家族はお互いに言葉を交わしあつたり影響しあいながら、ひとりひとり異なる性格を形成していきます。家族という集団における個人の位置（その人の負っている役割）は、家族全体のパターンやきょうだいの性格形成にある程度の影響を与えています。

家族ははじめ母親、父親、そして赤ん坊の三人で形成されます。そこでは、母親は妻と異なった役割を負っています。父親は夫とは別の役割を担います。赤ん坊が出現することによって、夫と妻の間に新しい側面を持った関係が生まれるのです。赤ん坊は夫婦の間にできたたった一人の子どもですが、その立場と赤ん坊自身の視点との間には微妙なズレがあります。赤ん坊は両親の注目を一方的に浴びる側です。母親と父親、すなわち一人っ子を持つ両親は、ありったけの注目を赤ん坊に注ぐ側にまわり、特に母親は、その役割のうえから最も赤ん坊に多くの注目を注ぐ存在となります。このような三人家族のなかで、ギブ・アンド・テイクの明確なパターン（すなわち相互作用のパターン化）が確立

されます。あるいは、どちらかの親がもう一方に対して子どもの側にまわる、ということも可能です。こうした関係は、おもに赤ん坊の誕生がきっかけとなって生じ、赤ん坊の行動によって両親に押しつけられたものです。

二番目の子が誕生すると、それまでの三人家族の立場がおのおの変化します。「王様」だった子どもは、たちまちその王座を追われてしまいます。彼は自分の立場の変化、王座を奪った相手、そしてこのような出来事を黙認している母親と父親について慎重に考えたうえで対応策を検討しなくてはなりません。家族構成が変われば、当然家族間の関係にも新しい要素がはいりこんできます。赤ん坊が新しく家族の一員に加わると、上の子は自分の立場を改めて築きなおさなければならないことに気づきます。つまり、二人兄弟の兄（姉）としての立場です。いっぽう、下の子どもは「赤ん坊」としての自分の立場をいち早く察知します。が、すでに兄（姉）がいるため、その立場は上の子どもが赤ん坊だったときのそれとはまた違った意味を持っています。

（中略）

家族の数が増えてくると、子どもたちは、みなそれぞれ自分なりの立場を見出します。そして多くの場合、「隣の芝生は青く見える」のたとえどおり、みんな自分が一番損な立場に立たされていると思うのです。二番目の子どもの存在は、一番上の子にとって大きなプレッシャーとなります。彼は内的環境に適応する際、まったく諦めてしまうか、または何かひとつでも弟より抜きんでたものを身につけることで埋め合わせるか、どちらかの方法を取ります。（中略）兄弟の順番が重要であるかどうかは、子どもたちひとりひとりがその順番をどのように受け止めているか、すなわち彼らが自分の順番をどう解釈しているか、によって異なります。一番上に生まれた子どもがみな、弟より抜きんでようとする競争意識を抱えているとはかぎりません。家族ひとりひとりが自分の立場をどのように解釈しているかによって、みなそれぞれ違った家庭が出来あがるのです。こうして幼いころに培われた解釈は、成長するまでずっと影響をおよぼします。家族はみなそれぞれが競いあっていますが、なかでも最もライバル意識が激しいのは一番上と二番目の子どもで、彼らは常にお互いを牽制しあっています。互いに刺激しあい、もっと努力するようになれば、という誤った考え方のもとに親が子ども同士を競いあわせたりすると、兄弟の間の闘争心はよりいっそう激しくなります。そして、親の思惑とは反対の結果が生じるのです。子どもたちはそれぞれ、自分より優れた相手に領分を明け渡し、落胆のあまり反対の方向へむかってしまうのです。どのような方法であれ、第一子が成功すれば二番目の子どもはその領分を支配されたと見なし、まったく異なる方法を求めるようになるのです。

### 3) 「ライフ・スタイル診断」(B.シャルマン、H.モサク) P.51～P.54

出生順位の影響について、アドラーの古典的記述には、次のような要点が含まれています。(1)同じ家族であっても、子どもたちは同じ環境下に生まれるものではありません。第2子は、第1子とは異なった心理的状况の中に生まれてきます。(2)実際に生まれた順番よりも、心理的状况が重要です。もし第1子が精神遅滞児であれば、第2子が第1子の役割を背負い込むことになるでしょう。(3)きょうだい間の年齢がかなり離れていると、競合がゆるやかになりやすい。(4)出生順位は、絶対的な決定要素ではなく、1つの影響力にすぎません (Adler,1964a,pp.96-120)

（中略）

これら5つの基本的な位置(\*)は、各位置に特有の経験を幼い頃にするようになるので、そのことに関連したある特徴をもつ傾向があります。どの位置も、他より良いというものではありません。どの位置にも有利な点と不利な点があります。また、どの位置にも課題があって、子ども時代にどのよ

うに課題に応えたかということが、おとなになってからの特性に反映されています。平均的な家族構造の中では各出生順位に最も普通に見られる特徴は、次のとおりです。

(中略)

第1子

第1子は、かつてすべてを自分のものにしていたし、今もイの一番であることを好むでしょう。第1子は、ある地位を占める資格が与えられていると感じがちで、たいてい達成志向です。

(中略)

トーマン (Toman,1969) には、これら出生順位の位置について自説があり、より細かく区別しています。それで、弟たちがいる長男について、次のように述べています。

『…力で示そうとずるがしこさで示そうと、他の男たちのリーダーであり長である。…男性と仲が良くできるが、とくに年下の男性とは仲がよい。…自分が選んだ仕事については、しっかり働こうとする (1969, p.44)。』

一方、妹たちがいる第1子の兄は、

『…本心であろうと口先だけであろうと、女性の友です。女性の愛情が、あらゆる関心事の中で最も重要です。…女性の仕事仲間がいれば、しっかり働くでしょう… (1969, p.44)。』

(\* : 第1子、第2子、中間子、末子、単独子)

#### (4) 「アドラー心理学を語る 3 劣等感と人間関係」野田俊作 P.74~P.76

きょうだいは、二種類の方法で、ライフスタイルの発達に影響を与えます。一つはきょうだいの誕生順位。一番上の子に生まれたか、真ん中の子に生まれたか、下の子に生まれたか、あるいはきょうだいがなくて一人っ子であったかというような、誕生の順位。これはライフスタイルの発達に大きな影響を与えていると言われています。

まず、一番上の子。男であれ女であれ、きょうだいの中の一番上の子というのは、どんな位置にあるかと言いますと、生まれてしばらく一人っ子だったわけですね。あるときお母さんは病院や産院から弟や妹を連れて帰ってきます。そして、「これはあなたの弟よ、かわいいでしょ。今日から一緒に暮らすことになったから、絶対に差別しないで平等に扱うから、だから仲よくしてあげてね」と言います。

けれども、子どもの立場に立ちますと、これは妙な話なんです。まず「かわいいでしょ」って言うけれど、「こんなもの、猿みたいで全然かわいくない」と思いますね。

それから、平等になんて言うけれども、今まで百パーセント親を独占していたのが、突然五十パーセントになったようなものですね。本当は五十ではない。赤ちゃんのほうが手間がかかりますから、二〇か一〇ぐらいまで落ちるかもしれません。突然、今まで王子さまだったのが、そこからころころと転げ落ちて、まったくの平民になってしまうわけです。

たとえば言えば、男性が、ある日、奥さん以外の女性を家に連れて帰ってきたみたいなものです。そして「これは今日からセカンドワイフ。あなたとまったく差別しないで平等に扱うから、仲よくしてやってね」と言うと、奥さんは逆上しますよね。これとまったく同じ状況が、きょうだい関係の中では、一番上の子に起こっているわけです。

そこで一番上の子は、その失われた王座を回復するために、何らかのアクションを起こさなければなりません。これが一番上の子のおかれた、一種の劣等性ですね。それを補償するのに、もちろん建設的的回答と破壊的的回答があります。

建設的な回答というのは、たとえばどんなものかと言いますと、この新しくやってきた下の赤ちゃんにくらべて、私は能力が優れている、たとえばこれもできるし、あれもできるということを見せることによって、親の注目や関心や賞賛を引こうというような動き方です。多くの一番目の子どもはこれを選びます。ですから一番目の子どもは努力家であることが多いです。非常に高い目標に向かって、理想主義者になって、努力をします。

破壊的な回答の例をあげますと、それは、他の子より自分のほうが力が強いこと、権力があることを示すということですね。ですから、弟なり妹なりをいじめます。そして喧嘩に勝つことでもって優越感を得ようとします。ですから一番上の子は、ときに支配的であり、非常に横暴であり、乱暴であることがあります。これは、第一子であることに対する破壊的な回答です。

#### (5) 「アドラー 家族カウンセリング」(O.C.クリステンセン) P.26～P.28

たとえ親が同じ育て方をしても、子どもは違う人間に成長する。個人心理学から見ると、実はきょうだいでありながら別々の家族システムに育つのである。二番目に生まれる子どもが会える家族は、一番目に生まれた子どもが会った家族とは異なる。一番目の子どもは夫婦二人の間に生まれるが、二番目の子どもは三人家族の中に生まれてくる。したがって、すべての子どもは違う家族システムに生まれるのである。また、同じ家族でも家族は絶えず変化しつづける。たとえば、新しい子どもの誕生によって、新しい家族関係が作られる。さらに、子どもの数が多い場合は、家族の人間関係がまったく異なる。たとえば、年上きょうだいが親に代わって子育てをしている場合がある。このように親が子どもを等しく育てようとしても、実際は同じように育てられないのが現実である。

第一子の特徴は、一定期間、一人っ子として育てられる点である。第一子はまわりの関心を一手に集め、特別扱いされている。ところが弟や妹が生まれると、誰も自分を特別扱いしてくれなくなる。一人っ子だった頃なら、ちょっといたずらをしただけで、まわりの者がたちまち世話を焼いてくれたのに、新入りが親の関心を独り占めにしてしまう。母親は下の子の世話に時間をとられ、自分のことをかまってくれなくなる。そこで第一子は「下の子のせいで、自分は無視されている」と嫉妬するようになる。

我慢強かった親も、下の子が生まれると急にイライラしてくる。第一子が赤ちゃんに興味を示して近づいたりすると、親は「赤ちゃんにさわっちゃダメ！」と金切り声をあげて、年下の子を守ろうとする。

第一子はこのような体験を通じて、世界観を再構築する必要に迫られる。そして、自分と家族の関係を今までとは違った視点で見られるようになる。何か新しいことをする際には、どんな危険があるかを綿密に調べてから、注意深く行動するようになる。また、はにかんだり、引っ込み思案になったりする。さらに、年下の子の悪いところを探し、自分が「良い子」であることを主張するような行動も見られるようになる。

第一子は年下の子に追い越されてしまうのではないかと恐れるあまり、自分の優越性を維持しようと必死になる。そのため、自分の行動に高い基準を設定し、いかなる犠牲を払ってでも成功しようと死に物狂いで努力する。または、高すぎる目標に勇気をくじかれ、目標達成をあきらめてしまう子もいる。

【引用文献】

「子どもの教育」アルフレッド・アドラー 岸見一郎 訳 一光社

「勇気づけて躰ける 子どもを自立させる子育ての原理と方法」ルドルフ・ドライカース／  
ビッキ・ソルツ 早川麻百合 訳 一光社

「ライフ・スタイル診断」バーナード・シャルマン ハロルド・モサック 前田憲一 訳  
一光社

「アドラー心理学を語る 3 劣等感と人間関係」野田俊作 創元社

「アドラー 家族カウンセリング カウンセラー、教師、セラピストのための実践マニュアル」  
オスカー・C・クリステンセン 江口真理子、柴山謙二、山口茂嘉 訳 春秋社